

## 巻頭言

千葉工業大学 田隈 広紀

今号では環境保護のプログラム活動を例とした国家のプログラム支援・推進スキームの紹介、ビジネススクールでのプログラムマネジメントの研究・教育活動の紹介、恒例の論文の書き方講座、DARPAにおけるプログラムの取り組み方と影響に関する解説等、多様な情報をご寄稿頂きました。さらには当学会並びに関連機関における大会・国際会議の報告・予告も掲載しております。是非ご一読頂き、P2M・プログラムマネジメントの知見を深める一助として頂きますと幸いです。

さて最近になって、ことに「プログラムマネジメント」という言葉をよく耳にするようになりました。私生活においても、友人から「ちょっと簡単に説明してよ」と求められる機会がありました（コンサートのプログラムを例にすると説明し易かったです・各楽曲をプロジェクトとして、その総和を超える満足をお客さんに与える催事全体がプログラム、という具合です）。また受け持っている講義で概略を説明すると興味を持つ学生が多く、人を惹きつける魅力的な領域であることは間違いありません。単体のモノ・コトづくりでは創出できないような価値システムを世に実装し、想定ベネフィットの回収までを責任範囲とするプログラムマネージャという人材は、「モノづくり大国」を次のステージへ推し進め、さらに多様かつ複雑な地球全体の問題の解

決にも重要な役割を果たすはずで

決にも重要な役割を果たすはずで。あくまで私個人の捉え方ですが、当学会はプログラムマネジメントの日本発の知識体系であるP2Mを「研究・普及」するプラットフォームと考えております。そこでの様々な活動を考えていく中で、まず「P2Mの哲学・精神」を肚に落とすことが何より重要であることに、最近になって気が付きました（不勉強ですね・・・）。この哲学・精神を礎に、最新のプログラムマネジメントを導入・活用・普及しようとする企業・行政・団体・個人が突き当たるであろう課題に対し、先回りして知見を示していけるようになっていきたいな、と日々妄想しています。

取り留めのない巻頭言となり申し訳ありません。2019年も当学会の刊行物や研究発表大会等を通して、皆様と共にこの魅力ある研究領域を開拓して参りたいと存じます。本年元旦の日経新聞の記事には、IoT、AI、ロボット、次世代通信技術、再生医療等の革新的技術に後押しされ、人類が新たな進化を遂げようとしていることが紹介されていきました。皆様一人一人の環境も慌ただしく変化していくことでしょう。こうした状況下で求められる新たな知見を、ゼロベース・全体調和の精神で共に創出していければと存じます。少し遅くなりましたが、本年も何卒宜しくお願い申し上げます。

2019年1月24日受理